



# 星空紀行

～銀河鉄道の夜汽車に乗って～

2013年03月08日

## 賢治、故郷へ帰る (1)～(4)

(1)

無二の親友である保阪嘉内との再会は、賢治を失意のどん底にたたき落とすことになった。賢治の側から見れば、いわば「裏切られた」形となったわけだ。

そのショックの大きさは、実は保阪嘉内も同じだった。悩みに悩んで、「宗教者として同じ道を歩いて行くことはできない」と賢治に告げるのに、相当に逡巡した形跡がある。それだけではない。嘉内は、まめに日記を書いていたのだが、賢治と再会した7月の月末から年末まで、全く日記が書けなかったほどである。

賢治は、夏の東京の夜空を見上げつつ、その胸の内をぶつけるところが無かった。いつもは丁寧な手紙を書く賢治が、原稿の裏に乱暴な字で書き送った手紙が、同じ信仰を持つ知人に宛てて送られている。

このまま宗教者の道を一人で歩いて行くべきか。東京にとどまるべきだろうか。そう思い悩む日々が過ぎるうちに、1921年（大正10年）の夏が過ぎ、秋の風が東京に吹くようになる頃のことだった。そんな賢治に、思いがけないニュースが飛び込む。妹のトシの病気である。もともとトシは病弱で、日本女子大学校（※）在学時代にも入院をしたことがあるが、その後、母校である花巻高等女学校の教諭心得となっていた。しかし、この夏には体調が優れず、喀血の後、寝込むことになり、9月で退職した。

賢治はトシ病気の知らせを受けて実家に戻った。もともと勝手に家出した身である。父親とも宗教

的な考え方の違いをそのままに、無断で東京に出てきたプライドもあったはずだ。失意にうちのめされたからといって、おめおめと実家に帰ることはできなかつただろう。そこへ妹の病気の報である。もちろん、仲の良い妹のことだから、そのままにはおけなかつたが、賢治にとっては、無理矢理に門を叩いた国柱会を辞し、故郷に帰る格好の口実となつたとみてよいだろう。

こうして、故郷に帰つた賢治は、その年の12月に稗貫郡立稗貫学校の教師となつて、それまで思い描いていたものとは別の道を歩みだす。こうして賢治は再び故郷・岩手の星空を眺めることになるのである。

※現在の日本女子大学。トシは1915年に家政学部予科に入学。

(2)

思春期の賢治は、「ほんとうにみんなの幸(さいわい)のため」(※)に自分自身が進むべき道として、法華経を、そしてその教えを広めつつあつた宗教団体「国柱会」へと傾倒していく。これには賢治の実家が、法華経とは系統の異なる宗派である浄土真宗の信仰が篤かつたことが、いい意味でも悪い意味でも大きく影響していた。賢治の父は、自ら仏教会を主催し、賢治を連れて行ったりしていたようである。また、日常のように聞かされていた「正信偈(しょうしんげ)」や「白骨御文章」は暗唱できてしまうほどであつたといわれる。こうした家庭環境は、おそらく宗教への理解の下地を作つたに違いない。

一方、その当時の飢饉や災害による農家の危機的状況や、困窮した人々を相手にせざるを得ない実家の生業、信仰とは一見裏腹に見える質屋という生業への反発は、賢治をして別の新しい信仰へ傾倒させていく要因となつた。こうして、賢治は突然家出をする形で上京し、「国柱会」の門をたたくことになる。大正9年、賢治24歳の時である。

このような思春期の篤い志は、しばしば冷静に考えると、あまりに突飛すぎて、社会的な常識とはかけ離れてしまい、簡単には受け入れられないことも多い。実際、国柱会の玄関で、賢治はいきなり「どうか下足番でもピラ張りでも何でもしますからこちらでお使ひくださいますまいか」と頼み込んだ。しかし、家出同然の青年をいきなり受け入れるわけにもいかない。門前払いをくらう形で、落ち着き先と仕事を探すことになる。

冬の寒風吹きすさぶ東京の町をさまよいながら、その夜空に輝く星々を、賢治はいったいどんな思いで見上げていただろうか。



(3)



突然の家出・上京。そして国柱会の門を叩いた賢治は、なかば門前払いとなる形で、寒風吹きすさぶ東京の町をさまよひ、住まいと仕事を探すことになる。察するに、賢治は最初から国柱会に住み込めると思い込んでいて、あまり持ち合わせもなかった。そこで、日本橋の書店に走り、予約してあった本をキャンセルして、当座のお金を工面したようだ。その意味では、周到な計画のもとに取った行動ではなかった。いずれにしろ、一時路頭に迷うような境遇となった賢治。東京の夜空に冷たく輝く星々を見上げたに違いない。そんな時、自分を見つめているような星たちの「瞳」を感じたのではないか、と思う。このとき、賢治は25歳。法華経を通して皆の幸いを実現するという、熱い思いがにじみ出た行動といえるだろう。

その後、東京帝大前の小さな印刷所での仕事を得た賢治は、志どおりに国柱会にも出入りするようになり、ここで賢治の創作に大きな影響を与える人物に出会う。国柱会の高知尾智耀（たかちおちよう）である。彼は、法華文学という概念を考えており、賢治の才を見抜いてのことか、ペンで信仰を広めるべく勧めたのである。この頃から賢治の創作活動は、短編童話や説話系の小説へと傾いていくことになる。「電車」「床屋」といった短編や、「かしわばやしの夜」などは、この時期に執筆されたものである。

だが、一年経たないうちに、賢治は書きかけの原稿をトランクに詰めこんで、何の未練も無いように郷里に帰ることになる。最愛の妹であるトシが病気となったことが、直接のきっかけであった。しかし、これは表向きの理由であったようだ。最近、明らかになった賢治の手紙の分析から、もうひとつの理由が見えてきた。それは賢治の熱意を一気に冷ましてしまうような、事件と言ってもいい出来事であった。



(4)

稗貫郡立稗貫農学校の教師というのは、賢治の人生の中で、大きなステップとなったことは確かである。生徒と向き合い、貧困な時代に前を向いて生きることを教える立場となったために、（少なくとも教師になるという点では、）それまでむしろ内面を見つめることに重きを置き、周囲に働きかける生き方を求めてこなかった賢治自身も前向きになっていったと考えられるからだ。

その現れは長く学校で歌い継がれるようになった「精神歌」など、いろいろな歌を作詞作曲して生徒に歌わせていったというだけではない。賢治が生徒たちへ施した、前向きで実にユニークな教育にも現れている。

農学校時代の教師としての賢治の実像を、当時の生徒に綿密な取材を行って浮かび上がらせたのが、「教師 宮沢賢治のしごと」（畑山博著）である。賢治が行っていた、きわめてユニークな授業の一端が代数、英語、土壌学、肥料学などの科目で再現されている。さらには、学校の外へ出たの各種

の実習の様子も生き生きと描写されている。

詳細は省くが、賢治はそれぞれの知識を伝授する時にも、既存の教科書などに頼ることなく、ユーモアを交えて、巧みなアナロジーを用いてわかりやすく紹介する術に長けていたようだ。この時代、しかもこの地域の、農家の息子には学問など必要ないという雰囲気の中で、農業の生産性向上という大切なノウハウだけでなく、物の見方や音楽や演劇などの芸術も積極的に取り入れることで、精神的な育成を含めた人格形成を目指していたと考えられる。先述の本の取材当時、すでに80歳を越えていた元生徒の人たちが、当時を生き生きと思い出すこと自体、賢治の授業の面白さ、そして影響力の強さを物語っているといえるだろう。

このような教育を続ける中で、賢治はなんと授業中に自分の作った童話などの作品を生徒に読み聞かせることもあったらしい。この作品の披露は、逆に賢治におおいに刺激を与えた事は間違いない。作品は聞く人、読む人があってこそ育つものだ。授業における読み聞かせを通して、自分の作品を育てていたのである。こうして、いよいよ代表的な作品が教師時代に生み出されていくことになる。

